

中村幹雄著

『ナチ党の思想と運動』

原田 一 美

「国民社会主義労働者党」——これは、わが国では通常「ナチ党」と呼ばれている政党の正式名称である。この党は、長い間「中間層の政党」だと考えられてきた。それではなぜ「国民社会主義労働者党」なのか。「国民社会主義」とは何なのか。ナチ党はなぜ「労働者党」と名のつたのか。これは、ナチズムを理解するうえで基本的な問題である。それにもかかわらず、「これまで一度も欧米のナチズム研究者によって真剣な究明の対象とされてこなかった」(二二頁)。本書は、このような研究上の「致命的な欠陥」の克服を第一の課題としている。

著者をナチ・イデオロギー研究に向かわせたのは、次のような認識であった。そもそもナチ党の、とくにヒトラーのイデオロギーは、これまで考察に値しないものとして軽視、あるいは「過小評価」されてきた。しかし、党やヒトラーの主張には、それなりに一貫した論理が認められるはずだ、という認識である。もちろんナチ・イデオロギーは「国民社会主義」にとどまるものではなく、多彩な要素をもっている。著者は、「国民社会主義」をはじめとする党のさまざまなイデオロギーを、それらの形成過程にさかのぼって解明、分析し、さらには、それらのイデオロギーから

導き出された具体的活動を克明に描き出す。つまり本書は、闘争期のナチ党のイデオロギーと社会的実践の全貌を明らかにしようという意欲的な試みとなっている。

本書の構成は、学説史(第一章)、国民社会主義構想↓労働者獲得政策(第二、三章)、農業イデオロギー↓農民獲得政策(第四章)、職能身分制構想↓営業中間層政策(第五章)となっており、これはまた、ナチ・イデオロギーが形成され、それが実践に移されていく順序をも示している。著者によれば、こうして、ナチ・イデオロギーは複合的性格を帯びるにいたり、それに応じて党の実践活動も多面的なものとなったのである。だが他方、ナチ党がその前身であるドイツ労働者党設立の時点から政権掌握にいたるまで首尾一貫して追求してきたものは、労働者問題の解決と労働者の獲得をめざす国民社会主義構想であったという。これはきわめて刺激的な主張である。というのはこれまで、ヒトラーや党指導部は労働者獲得には無関心であった、と考えられてきたからである。このことが示すように、本書は、とりわけ党のイデオロギーの分析において通説をくつがえす興味深い指摘に満ちている。したがって、ナチ党の複合的なイデオロギーと実践についての多岐に及ぶ本書の内容を、イデオロギー、それもヒトラーのイデオロギーを中心に紹介したい。紙幅の関係もあるが、これまでほとんど真剣に取り扱われてこなかったヒトラーのイデオロギーや発想の丹念な追求という点にこそ、本書の特徴があると思えるからである。

筆者はまず、ドイツ労働者党の創立者ドレクスラーの国民社会主義理念から説きおこす。ドレクスラーにおいては、「国民社会

と「社会主義」は、ともに「全体の優先という観点にたつて職能身分制的に再編成された新しい『国民』の形成」（四八頁）をめざす同意語であったという。しかし、そのような「国民」のなかには労働者が組み込まれねばならない。そのための不可欠の前提は労働者の「高尚化^{アデルツ}」（具体的内容については漠然としているという）、市民との「同権化」の達成である。たしかに、ドイツ労働者党は、旧中間層が望んでいた職能身分制秩序の樹立を要求してはいるが、そのためには労働者の「国民」への統合（労働者と市民^{ミッテ}中間層の「接近」、「団結」）を不可欠と考え、彼らの獲得をめざしていたのである。

ヒトラーが入党したのは、以上のような要求を掲げて活動していた政党であった。筆者は、ヒトラーの入党動機についてこれまでの説明をすべてしりぞけ、新しいテーゼを主張する。それは、ヒトラーがすでに労働者問題に関心を抱いてその「解決」を考えており、彼の構想がドレクスラーの国民社会主義構想と基本的に一致したためだというものである。著者によれば、「一九一九年九月中旬に、ヒトラーは労働者問題を彼なりの論理で『解決』し、それによって彼らを『国民』の中へ統合することを目指して、ドイツ労働者党へ入党した」（六七頁）のである。ヒトラーにもまた、次のように国民主義と社会主義の同一視がみられる。『国民的』と『社会的』とは、二つの同一の概念なのである。……『国民的』とは何はともあれ民族全体にたいする無限の、一切を包括する愛情を意味しており、『社会的』とは各個人が民族共同体のために行動することになるような、そのような国家と民族共同体を形成することを意味する」（六二頁）。そして、入党後のヒトラーの発

言においても、労働者が中間層よりも頻繁に言及されているという。たとえば、「われわれは労働者を獲得することを欲する。かかるが故にわれわれは労働者党なのである」（八二頁）。つまり、これまでの研究では見逃されてきた初期ナチ党やヒトラーの労働者志向性が強調され、また実際、党は労働者の関心を引きつけ、彼らの支持がある程度獲得していたという点も、最近の研究を手がかりにして強調されている。

これまで、一九二五年以降のナチ党再建期における党内の重要な問題は、シュトラッサー兄弟を中心とする社会主義的潮流^{ソシヤリスチッシュ}「ナチ左派」とヒトラーらミュンヘン党指導部の対立とされてきた。しかし、著者はこの点でも従来の定説を否定する。ヒトラーの国民社会主義構想^{ナチイデオロギイ}労働者志向性を強調する著者の論理からすれば当然と言えるが、「ヒトラーとグレーゴア^{グレイゴア}シュトラッサーの間には国民社会主義構想という基本的立場で見解の一致が見られた」（二〇〇頁）というのである。つまり、思想上の対抗勢力「ナチ左派」というものは存在するはずがなかった、ということになる。ヒトラーとシュトラッサーが共有していた態度として挙げられているのは、次のものである。(一)工業化の生み出す弊害(労働者の貧困化)についての認識、(二)企業家層の反社会的態度への批判(これが労働者と企業家間の政治的社会的反目を深め、労働者間にマルクス主義が浸透する素地となっているという認識)、(三)社会主義^{ソシヤリスチッシュ}国民主義という考え方である。著者は、(一)(二)から二人の「工業化への悲観的・敵対的態度」を引き出し、これを強調している。(この点についてはあとで触れたい。)(三)について、たしかにシュトラッサーは、「とりわ

け労働者の『社会的解放』を通じて彼らを『国民』の中へ統合する」という観点に念のため力点を置いて」（一〇六頁）、国民的社会主义ともまさに国民的社会主义と表現できるものであった。

シュトラッサーの労働者志向性を強調する著者は、彼の綱領草案についても従来の説をしりぞける。つまりシュトラッサー綱領草案は、大資本・大土地所有ばかりではなく、労働者にも銜先を向けた「小市民的社会主义」の立場に立つものとみなされてきたが、そうではない、というのである。著者によれば、この綱領草案をその執筆前後に発表したシュトラッサーの論説との脈絡のなかで考えると、彼は、「主観的には親労働者の立場にたっていたのであり、たとえ非現実的空想的な草案であったにせよ、労働者問題を解決し、それによって国民的社会主义の完成を目指した」（一一二頁）のである。

ゲッペルスについても、ヒトラーやシュトラッサーと同様な国民的社会主义構想がみられたとされ、バンベルク会議以後も彼の主張は基本的には変化しなかったという。

以上のように著者は、ヒトラー、シュトラッサー、ゲッペルスの間に存在した、国民的社会主义イデオロギーについての基本的な一致を強調する。そして、労働者の獲得をめざすこのイデオロギーこそナチ党が成立以来追求してきたものであり、「ある意味での首尾一貫性をもって実践に移され」（三四七頁）たという。しかし、三人のイデオロギーから党の労働者獲得路線が導き出されたとと言えるのだろうか。というのは、国民的社会主义構想から導き出される具体的活動として本書が取り上げているのは、ナチ経営

細胞機構の活動であるが、この組織設立のインシニアティブをとったのは、ヒトラーでも、シュトラッサーでも、ゲッペルスでもないからである。ベルリン大管区指導者ゲッペルスは、ベルリンでまず結成された経営細胞組織の拡大を奨励している。その意味で彼の分割が大きかったとは言えるだろう。問題はヒトラーである。著者によれば、ヒトラーは一九二六年になっても労働者組織の問題については態度を決定できず、その方向を模索している段階であった。（労働組合についてはその意義を肯定するものの、ナチ党独自の労働組合の結成を時期尚早として退けている。）そして結局、一九二九年夏の経営細胞公認という形をとって、彼の国民的社会主义構想は実践へと移されていくという。だが、ヒトラーがすでに入党時から国民的社会主义イデオロギーを抱いていたとすれば、またナチ党が当初から労働者獲得路線に尽力していたとすれば、この対応はあまりにも遅すぎるといふ感が否めない。このイデオロギー→実践の間の大幅な時間的ズレは、どのように説明できるのであろうか。

経営細胞の活動成果については、ベルリンなどの大管区における詳細な経営評議会選挙の結果の分析から、ナチ経営細胞が大企業労働者の間でも一定の支持を得ていたことが示されている。またこの結果から、ナチ党を支持したのは「非典型的な」労働者であったというヴィンクラーの主張は再検討の余地があるという興味深い指摘も行なわれている。

次に農業イデオロギーの問題に移ろう。これについては、ダレ一の「血と土」イデオロギー（民族の「若返りの泉」としての農民の称揚）があまりにも有名であるが、この主張は、これまで紹

介してきたヒトラーたちの国民社会主義構想や労働者獲得志向とは相入れないように思われる。本書は、なぜ「労働者党」の中にもこのようなイデオロギーが取り入れられることになるのかを、ヒトラーの農業問題にたいする態度の変遷を中心に丹念に追っている。

ヒトラーは、入党後、人口増大に直面してドイツ民族をいかにして扶養していくかを考え始めたという。彼は、産児制限、国外移住、土地からの収獲の増大、輸出のための商工業の振興などさまざまな可能性を検討していく作業を通じて、生存圏拡大構想に接近していくことになる。彼のドイツ民族扶養構想「生存圏拡大構想は、『わが闘争』を経て『第二の書』(一九二八年夏執筆)」において、「民族の生存にとつてもっとも確実な基礎は、何時の時代においても自己の土地なのである」(二二七頁) という結論とともに完成する。さらにヒトラーは、この過程のなかで、「社会ダーウィン主義を自覚的に取り込んで、生存圏拡大の道を合理化する」(二三三頁) のである。

以上のようにヒトラーの思考の跡をたどると、二八年という年がナチ党にとって非常に重要な画期であったことが浮かび上がってくる。すでにオーロウとスターチュラなどの研究者は、二八年が党の政策転換の年(都市労働者の獲得をめざす「都市プラン」から農民の獲得をめくろむ「農村プラン」へ)であったと主張していた。だが著者によれば、二八年が党にとって重要なのは、政策転換のためではなく、「都市プラン」に「農村プラン」が付け加えられたためであり、さらに戦術レベルの問題ではなく、ヒトラーの農業イデオロギーの成熟こそが重要なのである。

またヒトラーは、ドイツ民族扶養構想が生存圏拡大構想に向かつていく過程のなかで、農業ロマン主義を自覚的に取り込んでいくという。農業ロマン主義とは、ドイツの急速な工業化に直面して、土地と結合した農民層の維持こそが国家と社会の存続・発展にとり死活の重要性をもつことを強調する思想であり、一九世紀末以降多様な運動を展開していた。著者によれば、ヒトラーは、「工業化は農民層の弱体化を招き、かつ市民層と労働者層との対立を激化させて、民族共同体を分解へと追いやる」(二五一頁)として、工業化の進展に悲観的・敵対的な態度をとっていた。したがって彼は、単にドイツ民族の扶養を確実にするためだけではなく、まさにこの工業化に歯止めをかけるために生存圏拡大を構想したのである。つまり、ヒトラーは、「ドイツ民族を大都市から遠ざけ、新しく獲得された土地に農民として入植せしめたならば、それだけ『若返りの泉』としての農民層が確保され、そして大地や自然と結合する農民の活力は、ドイツ民族を更新・蘇生させるであろう」(二三三頁) と考えた、というのである。

ヒトラーは、以上のような農業ロマン主義的発想から農民層重視の立場に到達し、その結果、三〇年三月の農業綱領の発表をへて、ナチ党の農業獲得政策が本格的な実践へと移されていく、という。しかし、以上のような著者の論述にはいささか気になる点がある。というのは、党の農民獲得政策がヒトラーの純粋なイデオロギー上の立場から導き出されたかのような印象を与えるからである。たしかに戦術レベルだけを問題にする(この点で著者は、オーロウとスターチュラを批判している)のは一面的であろうが、イデオロギーだけを全面に押し出すのもまた一面的だと思われる。

政権掌握をめざす政党であれば、当然、その時々々の状況からさまざまな政治的配慮が入り込んでくるからである。

さて、「中間層の政党」と考えられてきたナチ党の思想と運動の最後にくるのが、中間層（小商人と手工業者）の問題であるのは非常に興味深い。ただこの点については、ナチ党内の急進的な反大企業親中間層の指導的人物オットー・ヴァーゲナーの職能身分制コーポラティズム構想が紹介されており、労働者や農民にたいして展開されたようなヒトラーの構想についての指摘はない。職能身分制構想が体制段階ではつぶされていくという事情を考えると、ヒトラーがこの点についてどのように考えていたのかについて知りたかった。また、すでにドイツ労働者党は職能身分制秩序の樹立こそを「社会主義」として要求していた。この要求とヴァーゲナーの身分制構想とはどのように関係しているのだろうか。

ナチ党は「中間層の政党」ではなく、国民政党であったという著者の主張に異論はない。「ナチ党員の社会構成内に占める労働者比率の軽視しえぬ高さは、この党の労働者志向性の反映であった」（三五六頁）という点も、その通りであろう。しかし、中間層の比重が労働者よりも高かったことも事実である。それはなぜだったのだろうか。「この党は労働者獲得を意図したけれども、労働者の既存の社会文化ミリューに阻害されて労働者が低く代表され、その反面中間層の高い代表が結果として生じた」と解釈すべきである」（三五六頁）という説明では、不十分のように思われる。本書によって、ナチ党がなぜ「労働者党」と名のつたかについては明らかになった。だが今度は逆に、その「労働者党」の

なかでなぜ中間層の比重が高かったのか、についてよくわからなくなってしまう感じがするのは残念である。

最後に、ヒトラーや他のナチ党指導者に共通してみられるという近代工業都市社会への反逆（「反近代」という点について触れておきたい。著者は、一見バラバラにみえる複合的なナチ・イデオロギーを統合する核となったものとして、この反近代主義を強調している。周知のように、すでに一九六〇年代にダーレンドルフとシューンボームは、ナチス・ドイツは、その反近代的イデオロギーにもかかわらず、意図に反してドイツ社会に一定の「近代化」をもたらしたと主張した。それ以降、ナチ支配の「近代化」効果の問題が、そして最近では、その効果はナチ党の意図に反してだったのか、意図に即してだったのか、大きな問題となっている。したがって、ナチ・イデオロギーが反近代主義的であったのか、そうでなかったのかは、非常に重要な問題であろう。

もちろん、評者はここで、ナチズム「反近代」という著者の結論に異論を唱えるつもりはない。ただ、ヒトラーらの「工業化への悲観的・敵対的態度」の引き出し方が少し強引だと思われる箇所があることを、指摘しておきたいだけである。たとえば、著者が例証として挙げているものを検討してみれば、ヒトラーが批判しているのは、あくまで企業家層の反社会的態度であって、工業化そのものではないように思われるところ（一〇二頁）がある。この点では、シュトラッサーやゲッベルスも同様である。（一〇三―一四頁、一二九頁）

本書は、これまでの研究を批判して、ヒトラーや党のイデオロギーのそれなりの首尾一貫性を強調するという刺激的な研究であ

る。だが、「思想家」ヒトラーを強調する反面、ヒトラーの「政治家」としての側面が後景に退いてしまっているという印象を抱いた。ヒトラーによる農民重視の立場にしても、非常に論理的に導き出されたかのように思えてしまうが、はたしてそうだったのだろうか。

そうはいっても、このような単なる印象は、「国民党」ナチ党の思想と運動にあらたな光をあてた本書の功績をいささかも損ねるものではない。著者も指摘するように、ヒトラーや党のイデ

オロギーの道徳的評価と、このイデオロギーに一定の論理を認め、これをきちんと分析することは、まったくの別問題である。そして、このような分析なしには、ナチズムの「魅力」もまた正確には理解できないであろう。この意味で、本書はナチズムの「歴史化」を大きく押し進めた貴重な研究と言えるだろう。

(A5判 三七三頁 索引五頁 一九九〇年二月 名古屋大学)

出版会 五一五〇円)

(追手門学院大学非常勤講師